

## 「高齢者の性」に関する研究（２） 高齢者の性に関する研究の動向と課題

島 村 澄 江， 秋 山 啓 子

水 戸 美 津 子， 桑 原 洋 子， 渡 邊 典 子

A Study of Elderly Sexuality (2)

A Study of movement and assignment about Elderly Sexuality

Sumie SIMAMURA, Keiko AKIYAMA

Mitsuko MITO, Youko KUWABARA, Noriko WATANABE

**Summary** The purpose of this study is to analyze how “elderly sexuality” have been treated in the light of historical transition and then to clear the assignment. (in the future) . The results were as follows.

- ①In the 1970’ s, the reports of “Elderly sexuality” began to be released.  
Those were reported in the field of nursing and care.
- ②In the 1980’ s, because of the increase of elderly population and the popularization of concept of Q.O.L, the interest of “Elderly sexuality” of the Japanese was generalized.
- ③In the 1990’ s, the necessity of reform of prejudice related to “Elderly sexuality” and the education for the professional nurses were involved in those researches.
- ④The researches of “sexual function of elderly people” have been done mainly about men.  
Concerning about elderly women, almost all the researches were focused on the function of Ovary.
- ⑤ “Elderly sexuality” is much more related to Q.O.L than sex.
- ⑥We found that there are a few researches concerning the treatment to “Elderly sexuality” of professional nursing.

**要 旨** 本研究の目的は、医療（看護）の中で高齢者の性がどのように扱われてきたのかを歴史的経過の中で分析し、さらに今後の課題を明らかにすることである。その結果以下のことが明らかになった。①1970年代に「高齢者の性」に関して看護および介護の現場から問題提起がされた。②1980年代後半からは高齢者人口の増加や Q.O.L の概念の広がりと共に一般社会でも関心が示されるようになった。③1990年代に入り「高齢者の性」に関する偏見の是正や、看護職の教育の検討に関する研究報告が目立ってきた。④高齢者の性機能に関する研究の多くは、男性を対象にしたものであって、女性については卵巣機能の研究のみがその大部分を占めていた。⑤「高齢者の性」は「性 (sex)」の側面と共に、より生きがいや Q.O.L に大きく関わっていた。⑥看護職の対応をどのように考えていくのかに関する研究は少ない。

**key word：** 性 (Sex)

高齢者の性 (Elderly Sexuality)

性機能 (Sexual Function)

セクシュアリティ (Sexuality)

## I. はじめに

現代社会における老年期は、余生として生きるにはあまりにも長いライフステージとなった。このため、老年期の生活の質（Q.O.L.）について論じられることが多くなってきた。松下<sup>1,2)</sup>は老年期のQ.O.L.維持のために、①心身の健康②家族間の愛情欲求の充足③経済的安定④心から理解しあえる話し相手がある⑤趣味やライフワークがある⑥仕事や役割があって周囲から感謝される⑦安住の住宅⑧適当な性的満足等が重要である、と指摘している。これら8項目の中で、我々が臨床で看護を実践するときに特に関連が深い事柄は、①心身の健康と⑧適当な性的満足に関わることであろう。しかし、実践の場においては心身の健康は重要視されても、実際には臨床場面でしばしば対応に苦慮する性に関わる事柄は無視されがちである。とりわけ高齢者の性の問題となると、一般の人々よりも性医学的な知識を持つ看護職ですらタブー視する傾向がある。

このような問題意識から、“「高齢者の性」に関する研究（1）」<sup>1,3)</sup>をまとめ、老年期にある人々の性にまつわる様々な問題は、それ自体が単独に存在するのではなく、その前提に一般社会の老いへの偏見があり、複雑であることを指摘した。さらに、看護職の中にも同様な偏見が存在するであろうことも示唆した。我々は、老年期における性はその人の存在に重要な意味をもつ生きがいや幸福感と、密接に関連していると考えている。

本論文においては、医療（看護）の中で、とりわけ「高齢者の性」がどのように扱われてきたのかを歴史的経過の中で分析し、さらに今後の課題を明らかにすることを目的とする。これは、臨床看護の質の向上という視点から意義のあるものと考えている。

“「高齢者の性」に関する研究（1）」<sup>1,3)</sup>で問題となったことに「性」という言葉の扱われかたの曖昧さがある。研究者により、定義のされかたが異なることや曖昧なまま使用されている。我々は、高齢者の性についてFig1.のように捉えている。従って、本文中「性」という言葉を使用するときは、石渡<sup>1,4)</sup>大島<sup>1,5)</sup>が指摘するようにsex、sexualityの2つの意味を含むものとする。このため特に意味を限定して用いる場合にはそれぞれ「性（sex）」、「性（sexuality）」という表現を用いた。

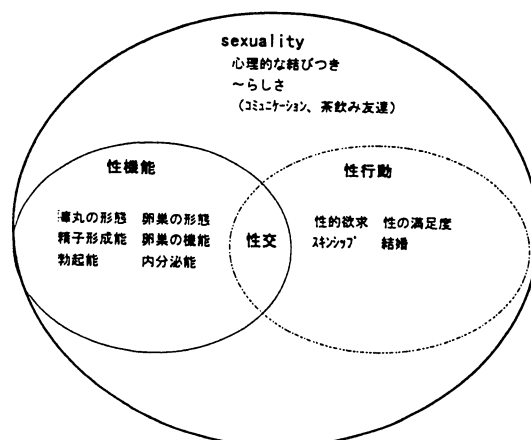


Fig 1. 高齢者の性

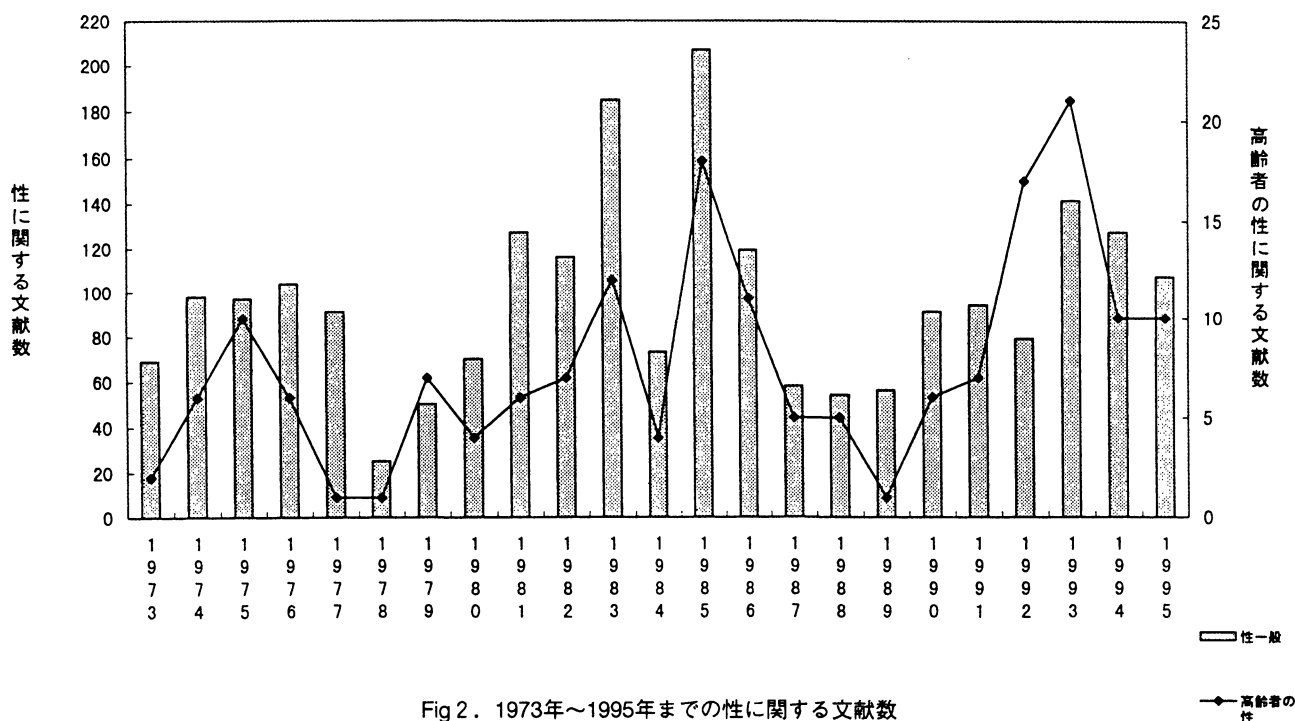


Fig 2. 1973年～1995年までの性に関する文献数

なお、本研究に用いた文献の範囲は、以下のとおりである。

- ①1973～1995年までの医学中央雑誌から「性」をキーワードとして検索した雑誌文献は2238、その中で「高齢者」に関する雑誌文献は177であった。(Fig2. 参照)
- ②1970～1995年までの日本件名図書目録から「性」をキーワードとして検索した単行本は880、その中で「高齢者」に関する単行本は16であった。(Fig3. 参照)
- ③①②の雑誌文献・単行本の引用・参考文献をもとに入手した雑誌37、書籍7であった。

## Ⅱ. 「高齢者の性」に関連した研究の動向

我が国は、1970年に全人口に占める老年人口（65歳以上）構成割合が7％を越え、WHO のいう“高齢化社会”に入った。高齢者が増加するに伴い一般社会で、様々な“老人問題”が取り上げられるようになり、医療・看護の場においても同様であった。

「高齢者の性」に関する研究としては、1973年に大工原<sup>17)</sup>が地域の老人を対象に行った実態調査が最初とされている。そのため、ここでは、1970年代からの研究動向について概観する。

### Ⅱ－１．1970年代の動向

看護分野における性一般に関する研究について、

「日本では学会報告や一部の学問領域を除くと、1974年に雑誌『看護』で“患者の性”という特集を組んだのが始まりであろう」<sup>1)</sup>とされている。雑誌『看護』は、看護分野における最初の専門職向けの雑誌（1949年12月創刊）である。

特集の内容は、入院及び在宅療養中の難病患者・心身障害者・結核患者等の事例の検討を通して、性はsexだけでなく、sexualityをも加味して考えていかなければならないというものであった。この中で、性に関する事柄は、日本の社会や文化・風習あるいは性の道徳的価値観が、臨床医学・看護の分野にまで大きく影響している<sup>2)</sup>と指摘され、医療・看護領域で、性は避けられタブー視され、看護教育や看護学の書物の中には、ほとんど性に関する看護は見あたらない<sup>1) 2) 22)</sup>と述べられている。

この前年（1973）に、地域の高齢者の性について調査した大工原<sup>17)</sup>のものがあ。保健婦であった大工原は、雑誌『看護』の特集で以下のように述べている。  
①男性の性交頻度は極めて個人差が強い②女性の大部分が性に対する嫌悪感を持っており外面的な欲求は低いが社会常識に強く規制されたもので、深層心理を解明すると結果は別になる③sexは長い結婚生活の間の諸事情が強く反映する④高齢者同士の再婚は社会規制がかなり強く、本人の意思もそれに引きづられている⑤性はタブーとされているため、微妙な部分はアンケートによる答えが真実かどうか疑問である。これは、

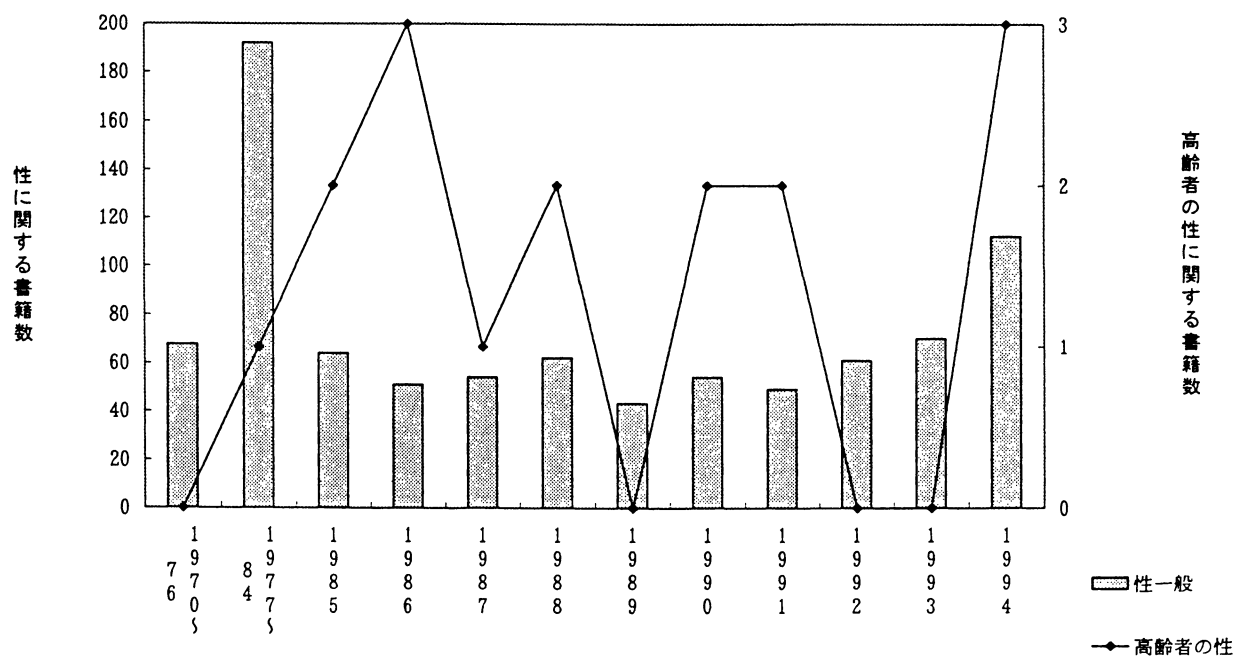


Fig 3. 1970年～1994年までの性に関する書籍数（日本件名図書目録）

厳密に調査研究としてみると方法等に不備が見られるが、その後現在まで、このような面接による詳細な聞き取り調査は行われておらず、調査のし難い内容ということを考えて十分に評価できるものである。

一方、臨床医学の分野では、1975年に雑誌『ホルモンと臨床』で「Aging と性機能」、1979年に雑誌『代謝』で「性」という特集が組まれた。これらはホルモンの視点からの男性の性機能に関するものであった。

一般社会では、1970年の厚生白書のサブタイトルに初めて「高齢者問題をとらえつつ」があげられた。1972年に老年学の先駆的研究機関である東京都老人総合研究所が設置された。また、同年には有吉佐和子の痴呆性老人を描いた『恍惚の人』<sup>23)</sup>は、一代センセーションを巻き起こした。“老年期の孤独、空虚、無為”を表現したボーボワールの『老い』<sup>24)</sup>が訳出されたのもこの年であった。これらは一般社会へ高齢者や老年期というものを暗いイメージとして印象づけたと考えられる。

## Ⅱ－２．1980年代の動向

1981年に看護婦である阿部初枝が書いた『たまゆらの』<sup>25)</sup>は、老人ホームでの赤裸々な老人の「性」の実態を描いた著作であり、これは生きることと「性」とが切り離せないことを我々に提示した。これは、臨床の現場からの報告であったが、新聞にも取り上げられ一般社会に大いに反響を巻き起こした。同じ頃、医療の分野ではQ.O.Lの概念について議論され始めた。深野木<sup>26)</sup>は慢性患者・癌患者・高齢者あるいは特定地域の生活者などを対象として、Q.O.Lを測定する研究が多数報告されている、と述べている。このQ.O.Lの概念の中に「性」という領域が明示されていた。

1984年に雑誌『産婦人科の世界』で「中晩年の性」という特集が組まれ、その中で、高齢者の性欲は生理学的視点から加齢に伴って低下するが、性行動、性経験は心理的な要因（価値観、道徳観、対人関係）によって規定され、人間の性行動は命ある限り続けられる。そして、質と量は年齢と共に変化し、生きがいと関連深い指標となること<sup>27) 28) 29)</sup>や、高齢者の望む異性関係として茶飲み友達や老婚という視点からの研究報告<sup>30) 31)</sup>も見られる。

看護領域では、1981年雑誌『看護』で「性を知る」という特集が組まれている。「性」はsexや生殖性だけでなく、人間存在の原点であり、人間生活とも密接な

関係を持ち、「性」の問題を抜きにして人間を捉えることはできない、また「性」は「生」とは切り離すことができないもので愛情・感情・倫理、あるいは精神的・社会的要因が絡み合ったものである<sup>32) 34) 36)</sup>と捉えられた。「性」はヒューマンセクシュアリティの視点から捉えられ、論じられるようになったのである。1985年には押山<sup>11)</sup>らにより、専門職に対する高齢者の性への意識や対応の実態調査が行われている。

高齢者を取りまく社会の動きも急激であった。1983年に老人保健法が制定された。同年に樋口恵子を代表とする「高齢化社会をよくする女性の会」が発足した。1986年には長寿社会大綱が出され、1988年には老人保健法の改正により、老人保健施設が創設された。従来の老人福祉法に基づく老人ホーム以外の老人施設であった。老人施設が増え、病院には社会的入院といわれる老人が増加し、臨床の場での高齢者のケアの中で「性」が対応に苦慮する問題として現れつつあった。これに対応するかのように『老人の性（介護者のための老人問題実践シリーズ）』<sup>38)</sup>が出版された。これは我が国初の高齢者の性に対する現場向けハンドブックであろう。

このように1980年代後半までは、地域の高齢者の性や老人ホームなど看護・介護の現場からの報告が始まり、問題の実態が明らかにされてきた。それに伴って職員の対応の方法についての調査がされたり、対応の仕方についてのハンドブックが出版されたりした。このように「高齢者の性」に関する限り、臨床現場からの問題提起が徐々に一般社会へも波紋を広げたといえるだろう。1989年朝日新聞“こころのページ”で〈老人の性〉がシリーズとして取り上げられ『老いること愛すること』<sup>39)</sup>という本になり出版された。このように「高齢者の性」の問題は一般社会でも論じられるようになったのである。

## Ⅱ－３．1990年代の動向

1980年代から看護の分野では「性」の問題に対応できるような、教育の必要性が叫ばれてきた<sup>40) 41)</sup>。そして、看護基礎教育のカリキュラム改正が1990年（平成2年）に行われ、それに伴い「性」に関する内容が「精神保健」に組み入れられた。同時に老人看護も独立した科目となった。この時期に雑誌『看護教育』で「性に関する授業」、雑誌『看護展望』で「看護教育の性の授業をどうするか」と、それぞれ「性」の授業に関する特集が組まれ、さらに「高齢者の性」に関して

1990年から1995年の5年間に、医療・看護系の雑誌7誌で特集が組まれている。「高齢者の性」も含め、「性」の問題への対応について、その人自身の「性」に対する考え方や教育歴等の背景が影響している<sup>10) 42) 44)</sup>ことが指摘されはじめた。

さらに、日野原重明氏らが中心となり開催された、高齢者ケア国際シンポジウム（1990-1994年：5回開催）の第4回（1993年）のテーマ「高齢者のクオリティオブライフ」の中で「性」の問題が取り上げられ、報告者以外に現場からの活発な討議が行われた。

また、心理学者である波田野完治氏は「我れ老ゆ故に我れ在り」<sup>45)</sup>の著書で、社会の中に依然としてある高齢者の性への偏見を取り除かなければ、高齢者の悲劇はなくなると強調した。

宮原<sup>2)</sup>は、「セクシュアリティの学であるセクソロジーは人間研究の領域にまたがる」と述べている。こ

のように90年代は、高齢者の性の問題が議論の対象となることが増え、それに加えて人間存在に関わる事として高齢者及び性への偏見の是正の必要性和、医療・看護専門職への教育の検討が強調されはじめてはいえるだろう。

### Ⅲ. 高齢者の性機能に関する研究

性機能に関する文献を内容別に分類すると、男性については①睾丸の形態②精子形成能③勃起能④内分泌機能⑤その他（性活動、性欲、射精能、性交回数、性的反応等）に分けられる。女性については、卵巣機能の研究がほとんどである。

性機能は高齢者の性行動やセクシュアリティを考える上で重要なものであるという視点から、先行研究より明らかにされていることについて述べる。（なお、取り上げた研究の概要はTable 1. に示す。）

Table 1. 高齢者の性機能に関する研究

文献番号	年・研究者	「テーマ」・目的	対 象	方 法	調査項目
47	1975 丹田均・寺田雅生・水戸部勝幸他	「加齢と睾丸内分泌機能」 加齢による睾丸の障害の進行過程	医科大生・泌尿器科外来・入院患者・ドック・老人ホームで生活している性腺機能正常男子378名	ホルモン測定：RIA 睾丸容積：Orchidomet 性機能：問診	Gonadotropin、睾丸容積、性機能など
48	1971 黒土稔	睾丸の形態学的検索	急死、事故死、自然死した男性378名	解剖検索	Leydig 細胞の形態学的変化造精能
50	1987 青木正治・熊本悦明・毛利和富	「性生活調査による本邦男性の性機能研究」年齢に伴う性機能の変化	某大泌尿器科外来を受診した20～89歳の男性の3389例	問診	性交回数の加齢による変化、早朝覚醒時勃起の状態、睾丸容積の加齢による変化
49	1987 熊本悦明・青木正治・山口康宏他	NPTの計測	3～82歳の健康男性130名	記載なし	NPTの計測
52	1990 丸田浩・熊本悦明・青木正治他	「性機能からみた男子更年期」性機能の加齢による変化とうつ状態との関連	20～80歳代の男子4168名	調査票郵送記入	性交頻度、性欲、勃起能、射精能、仮面うつ病スクリーニング
53	1979 西村隆一・穂坂正彦・今野稔他	「男性性機能の老化」下垂体性ゴナドトロピン分泌能	6～88歳の正常男子	記載なし	下垂体性ゴナドトロピン分泌能
51	1981 白井将文	「老年者の性機能」血中テストステロンの変化	304例のインポテンス患者	記載なし	血中テストステロンの変化
54	1975 今野稔・穂坂正彦・今村隆一	「正常男子血中 Testosterone の年齢変化」	6～88歳の正常男子	CPB法	血中テストステロンの変化
62	1987 一戸喜兵衛・田中俊誠	「更年期の始まりと閉経齢について」更年期の卵巣形態	195名の婦人	記載なし	加齢と卵巣重量の変化、加齢と発育卵胞の頻度の変化
67	1987 小山崇夫・市村三紀男・相沢ゆう子他	「更年期症状と血中ホルモンレベル」更年期症状と血中ホルモン	更年期症状を有する婦人107名（40～52歳）	血中ホルモン測定	更年期症状と血中ホルモン
68	1992 亀谷謙	「性機能の基礎 b）女性性機能」膣潤滑液の産生放出メカニズム	記載なし	膣壁の電子顕微鏡所見	膣潤滑液の産生放出メカニズム

### Ⅲ-1. 男性の加齢に伴う性機能の変化

#### Ⅲ-1-1. 睪丸の形態

睪丸の容積については中村<sup>46)</sup>と丹田<sup>47)</sup>が測定している。中村は、50歳頃より減少をはじめ、60～70歳前後になるとかなりはっきり現れ、左右差が大きくなるとしている。丹田らの結果によると、20～50歳代は平均18mlで変動幅も小さいが、60歳代より減少傾向を示し大きさのばらつきが大きくなり全体に小さい睪丸を持つものが多くなるとしている。睪丸の硬さについては中村も丹田も年齢と共に柔らかくなるとしている。

組織学的には、黒土<sup>48)</sup>によると、50歳代で精細管壁の肥厚が急激に増加する。また、20歳代後半より間細胞の退行性変化が見られるようになり、50歳代を過ぎると一層著明な変化が見られるようになる。Leydig細胞はその数の減少、小型化は20歳代後半から始まり、30歳代からはその変化が目立ち始め、50歳代では症例の59%は Leydig 細胞の退化現象（数の減少、小型化、変形、増加、大型化、集合という多彩な形態）が認められ、年齢が進むにつれ、退化 Leydig 細胞を示す症例数が多いことを報告している。

これらのことから、睪丸の年齢的变化は20歳代より徐々に始まっていることがわかる。

#### Ⅲ-1-2. 精子形成能

我が国における加齢による精子数の変化の報告は極めて少ない。熊本<sup>49)</sup>によると、加齢と共に明らかに数の低下がみられるとの報告がある。このことから、高齢になっても精子形成能は保持されていることがわかる。

#### Ⅲ-1-3. 勃起能

勃起能を心理的影響を除き、客観的に評価する指標として、早朝覚醒時勃起と夜間睡眠時陰茎膨張現象（nocturnal penile tumescence : NPT）がある。早期覚醒時勃起については、青木<sup>50)</sup>の調査によると20歳代では58%がほとんど毎朝自覚するが、60歳代ではほとんど自覚のないものが58.1%、70歳代では76.1%を占めている。NPT については熊本<sup>49)</sup>が最大陰茎周増加値を検討した結果、20～50歳頃まではほとんどの例が20mm以上の増加を示すが、加齢と共に徐々に低値を示した。また、睡眠時間に占める NPT 時間の割合は20歳前後で40%に達するが、60歳以降では20%に認められるという結果を報告している。

また、勃起能機序には末梢神経系や局所血管系あるいは内分泌学的環境やそれと連動する脳の性中枢機能が影響するという考えから熊本らは、勃起機序を動かす神経系機能が加齢により衰えることはないかという視点で球海綿体反射の反射伝導時間をみている。その結果、60歳以上で若年者に比べ伝導時間の延長は認められているものの加齢による延長はほとんどみられないとしている。血管系の変化については、陰茎血流動態の検査から、加齢により血管系障害の出現率が高くなり、その障害の高いものほど NPT の低下が強いことが明らかにされている。

また、勃起能は心理的な要因が深く関与する。白井<sup>51)</sup>は、勃起は単なる反射現象ではなく、大脳皮質の働きを伴うものであるから、神経系や血管系等に障害がなくても心理的要因により、年齢とは無関係に勃起しないことはしばしばみられるとしている。丸田<sup>52)</sup>は、生活上のストレスから生ずる鬱的な傾向と性的能力の関係について検討している。鬱傾向の高い群は勃起機能も低下する、という結果を明らかにし、その年齢のピークは55歳でむしろ70歳では社会的・家庭的ストレスから解放されるとしている。

これらのことから、勃起能に関しては年齢による身体的変化だけでなく、ライフサイクルを踏まえた社会的要因・心理的要因も考慮する必要があると言える。

#### Ⅲ-1-4. 内分泌機能

性機能の老化を論ずるには、gonadotropin 分泌状態を知ることが重要であるとした西村<sup>3)</sup>は、正常男子における血中 gonadotropin の加齢による変動を調べている。その結果、40～59歳群では24～39歳群の2倍の増加を示し、60～83歳群ではさらに増加傾向が認められる。「それは原発障害なのか、あるいは視床下部一下垂体系の異常も関与するものなのかの解明は性機能の老化を検討するにあたり重要である」<sup>3)</sup>と述べている。

加齢と共に睪丸の間質細胞の退行性変化があるとした白井<sup>51)</sup>は、老人睪丸では androgen の産生低下がみられることが考えられるとし、男子における androgen 分泌能を評価するには血中の testosterone の変化を測定するのがよい方法のように考えられると、述べている。そして、患者の血中の testosterone の値から70歳代までは若年者と比較して低下していないことを報告している。今野<sup>54)</sup>も血中 testosterone 値の年齢的变化をみているが、ある年齢を境として急激か

つ大幅な低下を示すものではない、個人差が大きく、かなり高齢まで正常成人レベルが維持され得ると解釈している。熊本<sup>49)</sup>は加齢と共に漸減していくとし、この変化が勃起調節機序にどのような影響を与えるかは確かではないと述べている。血中の testosterone の年齢的な変化については、白井<sup>51)</sup>や西村<sup>53)</sup>は大きな変動は見られないとするものと加齢により減少するものがあり必ずしも意見の一致をみていないとしている。

一方、性ホルモンは dopamine neurone を活性化し、それによって Gn-Rh neurone を抑え、gonadotropin 分泌を調節するというフィードバック機序があるとされている。dopamine level と性機能との関連性を明らかにするために熊本<sup>49)</sup>は高齢男性に dopamine を投与し NPT 値の変動観察をしている。その結果、NPT 値の上昇がみられ、この事実は血中 androgen－脳内 dopamine－性機能の間に密接な関連性があることを示唆しているといえる。

以上のことから、加齢と性ホルモンの推移が性機能にどのように関与しているかを明らかにしていくことが高齢者の Q. O. L を考える上で重要であるといえる。

### Ⅲ－２．女性の加齢に伴う卵巣の形態と機能の変化

一戸<sup>62)</sup>は加齢と卵巣重量の変化を見ているが、それによると20歳代から30歳代末までは最高14 gに及ぶが、40歳代にはいと低下しだし、50歳になると一定の低重量3 gにとどまることを報告している。

出生時、十数万個あった卵子数は30歳代末までは、緩やかな勾配で減少するが、40歳代に入ると急激に減少する。また、排卵を伴っている月経周期は、年齢が進むにしたがって周期の長さが短縮することが明らかにされている。このことから松本<sup>63)</sup>は卵胞が成熟するまでの日数が加齢と共に短くなると考えられ、卵の老化と関係があるのではないか、としている。

閉経年齢は、研究の年代が新しくなるにつれ延長しているという報告があるが、一戸<sup>62)</sup>は自身の疫学調査と諸外国の報告から、閉経年齢のピークは時代環境、人種、地理的条件をこえて、きわめて恒常的（49～50歳）なものであると述べている。また、1976年には First International Congress on The Menopauseにおいて、推定年齢が51歳であるとのコンセンサスが得られた、とされている<sup>64)</sup>。

森<sup>65)</sup>は、estrogen は老年期から、progesterone は

更年期からいずれも急激に減少する一方、下垂体の性腺刺激ホルモンは、更年期から急増し、70歳頃でもかなり高いことを明らかにしている。また、これについて森<sup>65)</sup>は卵巣を支配している性腺刺激ホルモンが増すのに、なぜ年をとるにつれて卵巣機能が衰えるかについて、卵巣での下垂体性 gonadotropin の取り込みが悪くなっていくことを明らかにしている。また、森<sup>65)</sup>や広井ら<sup>66)</sup>は、estrogen 分泌が減少することにより生殖器の皮膚や粘膜は菲薄化し、皮下脂肪は減少する。膣口は狭窄し、小陰唇・陰核は小さくなり大陰唇は平坦化する。膣は、短くなり径は狭くなる。子宮のサイズも小さくなり子宮内膜は萎縮する。progesterone も減少するが estrogen のような大きな影響はないとしている。

血中ホルモンに関する報告は老化に関する関心の高まりと共に多数になっているが、ライフサイクルでみると更年期までのものがほとんどである。更年期症状についてはホルモンと関連づけて考えられることが多かったが、最近ではホルモンレベル自体が更年期症状の発現の trigger になっているわけではないという見解が多いと小山ら<sup>67)</sup>は述べている。

亀谷<sup>68)</sup>は女性の性機能の鍵は、膣潤滑液の生成排出であるとしている。しかし、その生成メカニズムは解明されておらず、膣壁を電子顕微鏡で観察した結果毛細血管からにじみ出た血漿である可能性が高い。そして老齢になるにつれて、細胞間隙が狭くなり膣潤滑液が生成されにくくなる。40歳頃でも未婚の場合は老年に近い所見になることが認められた、と報告している。

森ら<sup>69)</sup>は、ステロイドホルモンとその生成や代謝に関連がある臓器の機能や性行動について検討しているが、性行動が加齢と共に減退するのは、性腺機能よりもむしろ精神神経機能がより関係が深いような印象があるとしている。

### Ⅳ．高齢者の Sexuality（性行動を含む）に関する研究

高齢者の性行動は、加齢に伴う性機能（生殖機能）の衰退により性交そのものよりもスキンシップやコミュニケーションなど、より広範な身体的・心理的活動へと広がり、性は高齢者の Q. O. L にとって重要な部分を占めるようになる<sup>77)</sup>。ここでは、高齢者の性行動について①「性 (sex)」、②「性 (sex)」以外の性行動、③「性 (sexuality)」としての性、について先

行研究より検討した。(なお、取り上げた研究の概要は、  
Table 2. に示す。)

Table 2. 高齢者の Sexuality (性行動含む) に関する研究

文献番号	年・研究者	「テーマ」・目的	対 象	調査方法	調査項目	調査期間
78	1985 大工原秀子	「老人の性をめぐって 高齢者の性に関する実態調査から」ー老人の性をめぐってー 高齢者の性に関する実態調査(1)	東京都260人、愛知県119人、北海道133人の在宅老人クラブ会員と在宅一般老人512人 男性262人 平均年齢72.5歳 有配偶者189人 女性250人 平均年齢71.5歳 有配偶者59人	老人クラブの集会場に集まってもらい調査項目を説明し各自で記入	基本属性、性的欲求の変化、性的欲求の程度、肉体的機能、性行為の有無、性行回数、性行為の相手、性生活の満足度、性的な楽しみ、自慰、性的不満の解消法、異性との交際希望、男女交際の見通し、男女交際の見通しがだめな理由	1973年 1月～ 3月
5	1990 大工原秀子	「老人の性をめぐって 高齢者の性に関する実態調査をもとにして」老人の性に関わる意識の変革が起こり得るかどうか前回と比較する	全国8カ所の老人学級受講生、老人クラブ会員、一般老人、経費老人ホーム入居者500人 男性286人 平均年齢71.0歳 有配偶者225人 女性214人 平均年齢69.2歳 有配偶者76人	集まった会場でアンケート用紙を配布し調査項目を説明し各自で記入	基本属性、性的欲求の変化、性的欲求の程度、肉体的機能、性行為の有無、性行回数、性行為の相手、性生活の満足度、自慰、性的不満の解消法、異性との交際希望、男女交際の見通し、男女交際の見通しがだめな理由	1980年 ～ 1985年
8	1992 荒木乳根子・井上勝也・大川一郎	「老年期のセクシュアリティに関する調査研究ー性差を中心としてー」性行動に限らずもっと広く異性への愛情や関心も含めてセクシュアリティの概念で広範囲に調査研究する	60歳以上の在宅の男性151人、女性277人の428人(福祉センター、高齢者センター、老人クラブ、老人大学学生等)	立ち会いの下、記入、大学へはクラス委員が説明後記入	性行動(性交渉、性的欲求、性的関心) 異性への愛情と関心、異性との関係(どのような関係を求めるか、異性との交際希望、老婚についての考え)、その他(性についての教えなど) 39問副次的問いも入れると51問	1990年 8月～ 10月
6	1984 高橋久美子	「老年期の性 老人の性意識と再婚意志の分析」老人自身の意識に焦点を当て、性的欲求のありようの問題にまで掘り下げて考察することによって、その要因を明らかにすること	60歳以上の年齢層、老人ホーム入居者と在宅者 男性243人、有配偶者200人 女性159人、有配偶者58人	一週間前後留め置き、自記式	老いの受容、異性関心の罪悪視と性的欲求(異性への関心・性的欲求の程度、性的欲求に影響を及ぼす要因)、再婚意志と理由(再婚の意志・再婚の影響を作る必要性・再婚意志の理由・再婚を希望しない理由・再婚意志に影響を及ぼす要因)	1982年 9月
56	1986 熊本悦明・青木正治・毛利和富	「加齢による男子性機能の変化」性生活調査から加齢に伴う性機能の変化をpotencyの面から検討する	1974年～1984年大学病院泌尿器科外来受診者の既婚 男性2,988人 20歳～89歳	初診時問診にて調査	性交渉の頻度、勃起能力	1974年 ～ 1984年
86	1994 内野英幸・能勢隆之	「老人に対する公衆衛生的アプローチ」老人の生きがい、心身の健康作りの観点から高齢者の性生活の実態を調査し併せて性教育を行うことによって高齢者の性に関するニーズと性教育のあり方、性と生きがい、性と健康の関係を検討する	1. 老人クラブ集団(214人うち有効回答157人について分析 男性70人[平均年齢72.6歳 有配偶者58人]、女性105人[平均年齢69.8歳、有配偶者55人] 2. 在宅老人夫婦個別面接調査(65歳以上の夫婦30組、平均年齢夫73.6歳・妻71.5歳)	質問紙記入 面接調査	健康状態と生活活動能力、生きがいと性、性生活に関する考えと希望(精神的関係・スキンシップ・性的交渉 性交・戯れあい ・回避・無関心)、性生活の状況(性欲・性的交渉・スキンシップ・異性との交流)、性的悩み、性的障害の状況とその原因	記載なし
85	1994 川田一郎	「高齢者の性」高齢者の性に対する理解は一般社会のみでなく高齢者自身にも充分でない実情がある。これを明らかにするために高齢者の性について調査する	60歳以上の老人クラブ会員 男性=1,036人、有配偶者672人、平均年齢69.68歳 女性=1,183人、有配偶者515人、平均年齢75.08歳	記載なし	性的欲求の有無・程度・満足度、性機能、自慰、性的楽しみ、異性との交際希望	1991年 7月



#### Ⅳ－１．「性（sex）」

「性（sex）」の有無について調査したものは４調査がある。文献によって、「性（sex）」は性交、性行為、性交渉、性的交渉、性生活という言葉が使われている。

大工原<sup>5) 7) 8) 79)</sup>は、２回（１９７３年・１９８５年）に渡り対象を変えて「老人の性意識実態調査」を行った。この２回の調査で“性行為が有る”と回答したものは男性は１回目７７％、２回目９６％、女性は１回目４６％、２回目９２％であり、女性の増加が見られた。また、“性行為の有無”は年齢に関係がなかった。しかし、女性の回答率が低く、“性行為の有無”は１回目の調査では、２５０人中２８人、２回目は２１４人中３８人しか回答していない。一方、熊本ら<sup>56)</sup>は“最近１年の性生活の有無”を調査し５０歳未満では９０％以上のものが“性生活を有している”が、５０歳代では２０％、６０歳代では５０％、７０歳代では７０％が“性生活を有さなくなる”と報告している。大工原の調査に比べ年齢によって“性生活の有無”にかなりの差が見られるが、熊本は対象者の違いではないかと述べている。

また、荒木<sup>80) 82)</sup> 荒木ら<sup>81)</sup>は前記の大工原の調査での女性のデータ不足を補えるよう調査を行っている。ここでは、“性交渉”について、“この一年間に性交渉のあったもの”は男性は５割強、女性は２割弱であり“月１回以上”は男性が４１％で女性の４倍となっている。しかし、女性は無配偶者が多いので有配偶者と比較すると“一年間の性交渉”では性差は減少するものの“月１回以上の性交渉”で比べると性差はやはり大きいと述べている。さらに内野ら<sup>83)</sup>の調査でも“性的交渉”がある人は男性７８％、女性３６％であり男性の方が多いことが報告されている。

さらに、副田<sup>84)</sup>や広井<sup>4)</sup>の諸外国の研究の検討においても「健康な男・女性の７０歳以上の大部分は規則的なペースで性交を行い、性的に active である」<sup>4)</sup>と述べている。

#### Ⅳ－２．「性（sex）」以外の性行動

「性（sex）」以外の性行動として、主に性的欲求（性的欲求の程度・性の満足度・不満・性的関心など）、結婚（再婚・老婚）、高齢者が望む異性関係についての研究内容を検討してみた。

##### Ⅳ－２－１．性的欲求

大工原<sup>5) 7) 8) 79)</sup>は、前記の２回の調査の中で、性的欲

求について調査し、“若い頃に比べ性的欲求が全くなかった”と答えている人は男性の１割弱、女性では４割となっている。“全くなかった”と答えている人は男女とも加齢に比例し、女性の割合は男性に比べると各年齢階層とも高い。２回の調査とも性的欲求を否定しているのは男性が４～１４％であるのに対して女性では５０％が否定している。そして性的欲求の満足度は男女とも２回目の調査の方が増えてはいるが、男性の５８％、女性の８１％が不満足と回答している。この性的満足度は配偶者に依存し配偶者が無ければ半減するが、配偶者がありながら４割強の男性は妻に依拠してはいる。その理由としては、「女性側の性交痛・快楽性のタブー、今までの男性本位のセックスなどが考えられる<sup>5)</sup>」と分析している。

また荒木ら<sup>81)</sup>の調査では、性的欲求は男性８０％、女性２６％が有しており男女差が認められる。年齢別で見ると男性は８０歳以上でも性欲を持ちつづけている人が多いが、女性は性欲がないという人が年齢段階毎に増えている。そして性的欲求不満は男性５３％、女性１２％が有していると述べている。

川田<sup>85)</sup>の調査においても性的欲求に関して男性の８６．４％が“若いころに比べると多少の差はあるが、ある”と回答し、女性は“全然ない”と“ほとんどない”をあわせると７０％になる。性的欲求の満足度においては男性は“部分的満足”を含めると５４．６％、有配偶者ではこれが７４．２％となり、無配偶者は２０．６％にしかない。女性では１８．４％、有配偶者で３３．７％、無配偶者では６．２％と男性に比べるといずれも少ない結果となっている。

高橋<sup>6)</sup>の調査においても性的欲求は“若い頃に比べ減ったがある”と答えたものは、男性５４％、女性は１０％にすぎず、女性は逆に性的欲求がないものが非常に多く、“今は全くない”と“今はほとんどない”をあわせると９０％以上となる。

どの調査においても男性は高齢になっても性的欲求を持っているが、性的欲求にはかなりの男女差が認められる。有配偶者においても男女の欲求の差が見られ男性の不満足が高い数値として現れている。

##### Ⅳ－２－２．交際希望・結婚願望

次に異性との交際希望や結婚について大工原の調査<sup>5) 7) 8) 79)</sup>では、２回とも“異性との交際を希望しない”が男女とも最も多く、男性３割、女性は６割と女性は男性の２倍となっている。交際相手への見通しも男性

7割、女性9割が“年だからあきらめる、身体的理由、家族の無理解、世間体が悪い”などの理由から異性との交際はむずかしいと回答している。また、再婚を望む者は、男性10%以下、女性はほとんどいない。また、男性では“茶飲み友達”が20～25%、“単に交際したい”が10～37%となっているが、女性は交際を希望しないものがほとんどである。

荒木ら<sup>81)</sup>の調査では、“異性を好きになる感情がある”者は、男性76%、女性38%であり、男女の差が見られることが報告されている。また、望ましい性的関係として、男性は性交渉を望んでいるが、女性は精神的な愛情やいたわりをはじめとする何らかの性的関係を望ましいと思っており、現実的な積極性は乏しいが、観念的には男性の愛情に包まれたいという気持ちを持っている者は多いと述べている。結婚について肯定的な考え方をしているのは男性58%、女性24%であり“グループつきあい”が男女とも50%、“茶飲み友達”が男性14%、女性6%となっている。

さらに川田<sup>82)</sup>の調査でも、異性との交際を望むものは、男性の50%、女性では10%にすぎず理由は、やはり“年だから”“世間体”があげられている。そして高橋<sup>83)</sup>の調査では、男女とも“異性への関心は恥ずかしいことではない”としているものが70%以上あるが、再婚の意志に関しては、“希望しないもの”が男性50%、女性88%と性差が認められる。男性の再婚理由には男性が妻を家政婦と同一視したような自己中心的な結婚観があると指摘されている。これらから高橋は<sup>84)</sup>「老年期の性や結婚は他の世代が持つ規範の圧力よりも老人自身が持っている性意識や結婚観、家族観自体が本来の欲求に否定的に作用していることがわかった」と述べている。

吉沢<sup>7)</sup>が「日本の老婚率は男女とも欧米の5～2分の1に過ぎず老婚後進国ぶりがうかがえる」と述べているように日本における高齢者の結婚率は低く、高齢者の交際に関しても、いまだ家族や社会の無理解や偏見がある。そして高齢者自身も今まで生きてきた社会での偏見や抑圧から、特に女性は異性との交際や結婚を望まないのではないだろうか。

#### IV-3. 「性 (sexuality)」としての性

内野ら<sup>85)</sup>は高齢者の生きがい、心身の健康作りの観点から高齢者にとって性がどのような意味を持つのか、生きがいとの関連はどうかということを調査している。性生活と生きがいと健康との関係では、性生活

が豊かなものほど生きがいも健康度も高いことがわかり性生活と生きがいと健康とが相互に影響しあっていることを確認したと述べている。

大工原<sup>5)</sup> 78) 79) は調査の結果から「高齢者の性」は「性の快楽性」と「コミュニケーションとしての性」を充足させる工夫が必要であり、パートナーの存在を強調している。

荒木<sup>80)</sup> 荒木ら<sup>81)</sup> 高齢者自身がセクシュアリティを男女関係の絆を深めるものと捉え、お互いに何を求めているかを理解し合うためのコミュニケーションを大事にしていくことが必要であろうと述べている。

井上<sup>77)</sup>は、高齢者にとっての性は、単に性交や性行為を意味するだけでなく、孤立や孤独をいやすためであったり、終いを看取ってもらうためであったり、様々な目的・意味を持っているとし、生きがいや Q. O. L.、孤独に関連するものとして必要であると捉えている。これは吉沢<sup>86)</sup> 熊本<sup>87)</sup> も同様に述べ、高齢者の生きがいのためには配偶者や恋人の存在が基本であることを強調している。このように「性 (sex)」という行為がなくても人と人との関わりを通して高齢者のもつ性を家族や社会、高齢者自身が認め大切にしていかなければならない。

#### V. 看護職の「性」への対応に関する研究

「性」についての看護職の対応に関する文献を内容別にカテゴリー分類すると、①看護職が会う「性」の問題②看護職の患者の「性」の捉え方③「性」に関する教育であった。また、「高齢者の性」に関する看護職の対応については①看護職の「高齢者の性」の捉え方、②「高齢者の性」に関する教育に分類された。(なお、取り上げた研究の概要は Table 3. に示す。)

Table 3. 看護職の「性」への対応に関する研究

文献番号	年・研究者	「テーマ」・目的	対 象	方法	調 査 項 目	調査期間
87	1988 坂口 けさみ・浦 富美子・田 中一美他	「臨床実習において看護学生が体験する性問題の実態とその関わり」看護学生の体験している性的場面とその内容	臨床実習をすべて終了した看護学生74名	自記式質問紙	①臨床実習における性的体験の有無②性的場面を体験した臨床実習場所及び看護場面③体験した具体的内容④対応の方法⑤その場面が学生に与えた影響	1986年 1月～ 1987年 1月
9	1983 中村 真由美・松 田たみ子・ 大谷真千子 他	「性への援助と性的羞恥心」看護者側の性的羞恥心を中心に、性の援助の現状との関係、および性的羞恥心に影響を及ぼすと考えられる因子との関係を明らかにする	都内某大学病院の病棟、外来16か所に勤務する看護婦、保健婦、助産婦、准看護婦	無記名による選択的解答法	私的羞恥心、職業的羞恥心について各々4項目を恥ずかしさの度合いを点数化し分類	記載なし
8	1994 高村 寿子・松本 鈴子・姫野 憲子他	「セクシュアリティに関する認識と援助の状況」実際に臨床で看護者が、自らも含めて人間のセクシュアリティをどう認識し、患者のセクシュアリティをどうとらえているか、その実態を明らかにし、セクシュアリティを尊重したケアを検討する	北海道から沖縄までの9地域の300床以上の中核総合病院19施設で臨床経験5年以上の看護者	自計式質問紙を用いた留め置き・郵送法	①セクシュアリティのとらえ方②性に関する講義の受講の有無とその内容③患者の性の認識の有無とその状況④患者の性の援助の有無とその状況⑤看護診断のための性に関する情報収集状況⑥患者の性のカンファレンスや看護計画の取り上げ状況⑦患者からの性の悩みや相談状況⑧患者からの性的言動の有無とその状況⑨現在の性に関する学習の有無とその内容、方法⑩看護教育の性に関する講義の必要性⑪これからの看護教育における希望講義内容	1991年 7月～ 8月
10	1994 吉瀬 由美・白水 準子・小深 田智子他	「患者の性問題への取り組み方と看護婦の性意識との関係」患者の性問題への取り組み方と看護婦の性意識との関係を検討する	福岡赤十字病院の看護婦	質問紙留置法（無記名）	①性問題に対する取り組み方②性認識③看護婦が患者の性問題に関わりにくい理由	1993年 9月～ 10月
88	1995 渡辺 純一	「性の看護の意識と臨床での実情」青年期男性入院患者のセクシュアリティについて検討する	看護婦	記載なし	①性に関した看護の必要性②入院患者の性に対する看護婦の必要性③看護婦の考える患者への介入	記載なし
89	1992 高村 寿子・松本 鈴子・松本 清一	「看護教育における性に関する教育の現状と今後の課題」各看護学校・短大・大学が、性に関する科目をどのように展開しているか、その現状と問題点を把握する	全国の看護教育機関一覧にもとづき、看護学校、短大、大学	自計式質問紙郵送法	①カリキュラムにおける位置づけと編成形態②教育担当講師の背景と依頼理由③教育内容の実際④教育方法と授業展開の重点および学生の反応	1992年 2月～ 3月
92	1990 松田 日登美・木 内和江・中 尾操江他	「老人の性に対する看護婦の意識調査」一般病院で働く看護婦が、老人の性に対して、どのようなイメージをもっているのか、またそれは看護婦の背景により差があるか	某総合病院成人外科、内科系病棟、外来で勤務する看護婦、准看護婦	質問紙調査法（留置法）	老人の性に対するイメージ 看護婦の背景①年齢②婚姻③老人との同居経験④老人の性に関する教育⑤老人の性に関する体験⑥老人の性に関する関心⑦老人の性に関する知識	1986年 11月～ 12月
44	1993 橋爪 伊津江・田 中あけみ・ 平田喜美代	「老人の性への対応方法と看護婦の背景との関連について」	和歌山県立医科大学付属病院の病棟勤務の看護婦	質問紙法	押山ら（11）の調査項目を一部変更	1992年 11月
11	1985 押山 トシ子・斉 藤由美・斉 藤由美子他	「老人の性に関する保健婦及び保健婦学生の意識調査」保健婦及び保健婦学生らが、老人の性を考えて老人に接しているか、老人の性を考えて老人に接することができるようになるためには何が必要かを検討する	臨地実習施設の保健所保健婦・市町村保健婦、看護教育機関看護婦、本学院保健学生の一部	質問紙を用いた郵送法または集合法	①保健婦経験年数②年齢③配偶者の有無④老人と年齢⑤老人に関する教育⑥老人との同居⑦老人の性交可能年齢⑧老人の性交をどう思うか⑨老人の性欲の有無と程度⑩老人の性交の実際⑪男性の性交可能年齢⑫女性の性交可能年齢⑬老人の性を考えて接しているか⑭保健指導の中に老人の性を取り入れたことはある⑮老人の性に関して相談を受けたことがあるか	1982年 12月
93	1989 渡辺 晴美・久保 田美穂・佐 衛田泰子他	「老人の性に関する学生の意識調査」	福岡県内の一般学生（大学1、女子短大1）、医療系学生（医学部1、看護学校3）	自記式質問紙法によるアンケート調査	①対象者の背景・年齢・学生別・祖父母の有無・性別・祖父母との同居経験の有無②老人と年齢③人間の性に対するイメージ④老人の性のイメージ⑤老人の性への関心⑥老人の性的欲求の有無、程度、解消方法⑦両親および学生自身の老後のパートナーの必要性	1988年 9月～ 11月
94	1989 児島 良子・小河 信子・青柳 節子他	「看護学生の“老人の性”に関するイメージと教育の効果」	S短期大学第1学年	記載なし	老人看護学概論の「日常生活の援助」の中に「老人の性」の単元を位置づけ、老人の性をアセスメントし看護介入できる看護者の育成を目的に授業を実施したこと	1988年 8月～ 11月

## V-1. 「性」に関する看護職の対応

### V-1-1. 看護職が出会う「性」の問題

看護職が出会う「性」の問題の実態については、看護婦を対象にした高村ら<sup>8)</sup> 42) 松本ら<sup>43)</sup> の調査、看護学生を対象にした坂口ら<sup>87)</sup> のものがある。高村らは、患者から性的言動を受けたものは39.1%であり、「患者の性 (sexuality)」を認識したことがある者は72.8%であるとしている。坂口らの学生に対する調査では、臨床実習中に性的場면을体験した者は67名中30名 (44.8%) で、ほとんどの病棟で性的場面に出会う機会があり、患者の年齢も10歳代から70歳代と幅がある、と述べている。

### V-1-2. 看護職の患者の「性」の捉え方

看護職が患者の「性」をどのように認識しているかについては、中村ら<sup>9)</sup> 高村ら<sup>8)</sup> 42) 松本ら<sup>43)</sup> 吉瀬ら<sup>10)</sup> 渡辺<sup>88)</sup> のものがある。

高村ら<sup>8)</sup> は「看護職自身の性の捉え方は、夫婦生活と愛に集約されていた。性をもつ他のさまざまな要素、たとえば、コミュニケーション、親密・連帯性、人間関係あるいは快楽性などの広い視点で捉えている者は少なかった」としている。また、「患者の性」を認識したことがあるかについては、“性の問題を認識したことがある者”は72.8%であるが、“実際になんらかの援助をしたことのある者”は47.5%であるとしている<sup>8)</sup> 42) 43)。渡辺<sup>88)</sup> は、“患者の性 (青年期男性入院患者の sexuality) を考えたことのある者”は46.4%であるとし、処置や性機能上・疾患上に問題のあった時としている。

看護職の「性」の捉え方と看護の取り組み方については、高村ら<sup>8)</sup> 42) 松本ら<sup>43)</sup> は、年齢が高くなるにつれて、特に40歳代の人々が患者の性の問題をまず受けとめようとし、セクシュアリティを尊重したケアに積極的に取り組もうとしている状況が伺われたとしている。中村ら<sup>9)</sup> は「年齢が高まるにつれ患者に対しての性的羞恥心が弱まる」としている。また、吉瀬ら<sup>10)</sup> は「看護婦の背景においては、結婚や出産の有無、勤務年数には関係なく性問題に関われるという認識を持つものが積極的に取り組んでいた」と述べている。年齢の高い人に性を肯定的にとらえ、積極的に対応している人が多いこと<sup>8)</sup> 42) 43) は、これまでの人生経験や看護の積み重ねのなかから、身につけたものとも考えられる。しかし、看護職として実際の臨床看護に関わる人の多くは、年齢的に若いため教育の責任は大きい

と思われる。

### V-1-3. 「性」に関する教育

看護職が「性」に関する教育をどの程度受けているかの調査には、高村ら<sup>8)</sup> 42) 松本ら<sup>43)</sup> 渡辺<sup>88)</sup> のものがある。高村ら<sup>8)</sup> 42) は“性に関する講義を受けたもの”は47.8%と半数弱であり、年齢が高くなるにつれて受けていなかった、としている。渡辺<sup>88)</sup> は看護学生時代に“性に関する講義を受けたもの”は全体の73.4%で、年齢が若いほど“受講した”と回答したものが多かった、としている。また、卒業後に「性」に関する事柄を学習しているのは、9.2%<sup>8)</sup> 42) 43)、10.2%<sup>88)</sup> であり、学習したいがその内容や機会に乏しいとしている<sup>42) 43) 88) 89)</sup>。

では、実際に「性」に関して看護基礎教育ではどう展開されているかについては、高村ら<sup>89)</sup> 高村<sup>90) 91)</sup> の調査がある。カリキュラム改正 (1990) の2年後の調査では、カリキュラム改正により「性」に関する科目は明確に柱立てされたが、内容は各校に任されていた。「性」に関する科目の位置づけや教育目標、開講学年や時期、担当講師の選択、教育内容や教育方法、評価などは試行錯誤の状態のようであるとしている<sup>89) 90) 91)</sup>。

## V-2. 「高齢者の性」に関する看護職の対応について

### V-2-1. 看護職の「高齢者の性」の捉え方

松田ら<sup>92)</sup> の調査では、看護婦は「高齢者の性」に対するイメージを、“自然”“健康”“愛情がある”“許せる”というように肯定的にとらえている傾向があった。看護婦の背景としては、30歳代以上の者、高齢者との同居経験のある者、「高齢者の性」に関する体験をした者、知識や関心のある者のほうが好意的であると述べている。

橋爪ら<sup>44)</sup> の調査では、結婚の経験のある者、高齢者との同居経験のある者は「高齢者の性」に関して積極的であるとしている。同居経験については押山ら<sup>11)</sup> の報告でも「65歳以上の方と同居している者が老性を考えて老人に接することができるという意味を考えると、同居している者は老人のイメージを描きやすく、老人に対して柔軟に対応することができるからと言えるのではないか」と述べている。

### V-2-2. 「高齢者の性」に関する教育の現状

学生の「高齢者の性」のうけとめ方の調査には、一般学生と医療系学生を対象にした渡辺ら<sup>93)</sup>、看護短期大学生を対象にした児島ら<sup>94)</sup>、保健婦学生を対象にした押山ら<sup>11)</sup>のものがある。渡辺らの調査からは、一般学生と比べて医療系学生が「高齢者の性」についてプラスイメージが多い傾向が明らかにされた。

看護基礎教育で「高齢者の性」に関する教育を受けた者は、20.2%<sup>92)</sup> 24%<sup>94)</sup>と低くなっている。この要因として、これらの調査が、カリキュラム改正以前に教育を受けた者を対象としていることが考えられる。また、調査としては対象が1病院と限定されており、全体的な傾向をみるには至っていない。

児島ら<sup>94)</sup>の調査では、「高齢者の性（Human Sexuality の概念に基づく）」の授業前の学生のイメージは、性の身体的側面に視点が集まり、人間特有の精神面、社会面には理解の及ばない学生が多かったとしている。また、「高齢者の性」に関する討議法を中心とした共同学習を行うことにより、「高齢者の性」の欲求を基本的欲求として理解し、集団討議は学級全体の「高齢者の性」の価値観を望ましい方向へ変化させる、としている。このような授業展開の具体例を示すことも今後は重要であろう。

## VI. 結語

本論文では、医療（看護）の中で「高齢者の性」がどのように扱われてきたのかを歴史的経過の中で分析し、さらに今後の課題を明らかにすることを目的とした。その結果、以下の点が明らかとなった。

- ①「高齢者の性」の問題に、いち早く問題提起したのは、臨床看護・介護の現場であった。1973年の大工原の地域看護の場からの調査報告であり、もう一つは1981年介護の場からの阿部初枝『たまゆらの』であった。
- ②1980年代は、老人保健・医療・福祉の制度が急激に変化した時代であった。1983年老人保健法が施行され、1986年には長寿社会大綱が出された。医療の現場では、Q. O. L. やホスピス運動などが活発に議論され具体的な実践が模索された。「高齢者の性」についても多くの現場での取り組みが報告されていた時期であった。1989年の朝日新聞〈こころのページ〉に「老いること愛すること」が連載されたのは1989年であった。
- ③増加の一端を辿る65歳人口に対し行政は、1990年高齢者保健福祉推進十カ年戦略（通称：ゴールドプラン）

を開始した。同年から5年間、日野原重明氏らが中心となり「国際高齢者ケアシンポジウム」が開催された。前者は、量的な整備を志向し、後者は質的な面の向上を目指した活動であったといえる。看護基礎教育の場においても、1990年看護基礎教育課程のカリキュラム改正が行われ、老人看護学が独立し、「性」を正課として取り上げる精神保健が加えられた。1993年には「高齢者の性」を扱った波多野完治氏『我れ老ゆ故に我れ在り』がベストセラーになった。そして、1995年老齢人口が全人口の14%を超えた。

④1990年前後より性機能に関する研究は、従来の男性の性機能を中心としたものばかりでなく女性の性機能に関する研究も目立ってきた。しかし、女性については卵巣機能の研究のみがその大部分を占めていた。

⑤性行動は加齢に伴う性機能（生殖機能）の衰退により性交そのものよりもスキンシップやコミュニケーションなど、より広範囲な身体的・心理的活動へと広がり、性は高齢者にとって重要な部分を占めている。

⑥看護職が高齢者の性についてどのように受け止めているのか、また高齢者の性に関する教育の方法論については今後検討の余地がある。

## 〈引用文献〉

- 1) 川野雅資（1990）：特集 患者の性と生 患者の性を考える時に考慮しておきたいこと，看護，42-9，59.
- 2) 宮原忍（1995）：特集 性科学の水準－第12回世界性科学学会の業績から セクソロジーとはなにか，助産婦雑誌，49-12，13.
- 3) 西村隆一・穂坂正彦（1979）：男性性機能の老化，代謝，16，697-705.
- 4) 広井正彦（1993）：高齢者の性 老人施設での問題も含めて，産婦人科の世界，45，4.
- 5) 大工原秀子（1990）：老人の生と性 老人の性意識実態調査をもとにして，看護，42-12，174.
- 6) 高橋久美子（1981）：老年期の性 老人の性意識と再婚意志の分析，家政学雑誌，35-4，63.
- 7) 吉沢勲（1992）：老人福祉の立場からみた高齢者の性，GERONTOLOGY，4-1，64.
- 8) 高村寿子・松本鈴子・姫野憲子 他（1994）：研究 看護職の性 セクシュアリティに関する認識と援助の状況，看護実践の科学，1994，9，91.
- 9) 中村真祐美，松田たみ子，大谷真千子他（1983）：特集 性の問題と看護婦による援助・指導 性への援助と性的羞恥心，看護展望，8-9，16.
- 10) 吉瀬由美，白水準子，小深田智子他（1994）：患者の性問題への取り組み方と看護婦の性認識との関係，看護総合，第25回，97.

- 11) 押山トシ子, 斉藤由美, 斉藤由美子他 (1985) : 老人の性に関する保健婦及び保健婦学生の意識調査, 保健婦雑誌, 41-3, 227.

# 〈参考文献〉

- 12) 松下正明 (1993) : 表出としての老人の性, 老年精神医学雑誌, 4-12, 1372~1374.
- 13) 水戸美津子, 桑原洋子, 秋山啓子他 (1996) : 「高齢者の性」に関する研究 (1) “老いのイメージ” と “高齢者の性” のとらえ方, 新潟県立看護短期大学紀要, 1, 13~23.
- 14) 石渡利康 (1987) : 性権と人間存在, 高文堂出版, 12.
- 15) 大島清 (1995) : 性紀末, 毎日新聞社
- 16) 大島清 (1990) : 老いを「脳」で定義する, 情報センター出版局
- 17) 大工原秀子 (1974) : 特集 患者の性 老人と性—実態調査とその中の私, 看護, 26-4, 32~43.
- 18) 村岡空 (1974) : 特集 患者の性 結核病棟のウィタ・セクスアリス, 看護, 26-4, 56~60.
- 19) 浦辺竹代 (1974) : 特集 患者の性 療養中の性, 看護, 26-4, 10~17.
- 20) 稲岡文昭 (1974) : 特集 患者の性 看護職は患者の性をどう考えるか, 看護, 26-4, 24~31.
- 21) 山岸春江 (1974) : 特集 患者の性 難病の人にみる性の感情, 看護, 26-4, 18~23.
- 22) 滝沢清人 (1974) : 特集 患者の性 患者の性的意識と治療共同体, 看護, 26-4, 44~48.
- 23) 有吉佐和子 (1972) : 恍惚の人, 新潮社
- 24) ボーボワール (1972) : 老い, 人文書院
- 25) 阿部初枝 (1981) : たまゆらの, 日本看護協会出版会
- 26) 深野木智子 (1992) : 疾病を持つ対象のQuality of lifeを測定するための方法論, 看護研究, 25-3, 85.
- 27) 長池博子 (1984) : 特集 中高年の性 生きがいと性, 産婦人科の世界 秋季増刊, 34, 43.
- 28) 石浜淳美 (1984) : 特集 中高年の性 中高年における性反応の特殊性, 産婦人科の世界 秋季増刊, 34, 32.
- 29) 小此木啓吾 (1984) : 特集 中高年の性 中高年の心理と性, 産婦人科の世界 秋季増刊, 34, 9.
- 30) 梶博久 (1984) : 特集 中高年の性 老人の性と茶飲み友達, 産婦人科の世界 秋季増刊, 34, 69.
- 31) 森幹朗 (1984) : 特集 中高年の性 老婚, 産婦人科の世界 秋季増刊, 34, 97~104.
- 32) 福原隆子 (1983) : 特集 看護のなかの性 看護において患者の性をどうとらえるか, 看護学雑誌, 47-3, 276~281.
- 33) 志津紀子 (1985) : 特集 臨床で遭遇する患者の性の問題に 脊髄損傷患者の性指導に伴う困難, クリニカルスタディ, 6-7, 103~107.
- 34) 木村宏子 (1985) : 特集 性への看護を考える 看護の中の“性”—看護婦としてどうかかわるか—, ナーシング, 5-2, 173~178.
- 35) 木原和子 (1985) : 特集 臨床で遭遇する患者の性の問題に 患者の性的言動に直面して—看護婦の対応のあり方を考える, クリニカルスタディ, 6-7, 108~115.
- 36) 久保成子 (1981) : 特集 性を知る “人間看護” における性の理解, 看護, 33-12, 18~24.
- 37) 引地ユリ (1981) : 特集 性を知る 健康に生きることと性—学校教育のなかから—, 看護, 33-12, 26~32.
- 38) 梶博久, 吉沢勲 (1988) : 老人の性 (介護者のための老人問題実践シリーズ), 中央法規出版
- 39) 朝日新聞社刊 (1944) : 老いること愛すること, 朝日新聞社
- 40) 木村宏子 (1983) : 特集 性の問題と看護婦による援助・指導 看護婦による性指導はどこまでできるか, 看護展望, 8-9, 28.
- 41) 関戸好子 (1980) : 特集 看護のなかの性 看護における性の理解—アメリカ合衆国での性問題への取り組みを中心に—, 看護学雑誌, 47-3, 290.
- 42) 高村寿子, 松本鈴子, 西本勝子他 (1992) : 特集 セクシュアリティと看護教育 全国調査にみる看護婦のセクシュアリティ認識, 看護教育, 32-10, 737~743.
- 43) 松本鈴子, 高村寿子, 西本勝子他 (1992) : 看護職のセクシュアリティ認識とケアの可能性, 看護総合, 23回, 228~230.
- 44) 橋爪伊津江, 田中あけみ, 平田喜美代 (1993) : 老人の性への対応方法と看護婦の背景との関連について—アンケート調査より—, 日本看護学会誌 老人看護, 24回, 171~173.
- 45) 波田野完治 (1993) : 吾れ老ゆ故に吾れなり, 光文社
- 46) 中村亮 (1961) : 日本人男性の性器系発育と成熟, 日泌尿会誌, 52, 172~188.
- 47) 丹田均, 寺田雅生, 水戸部勝幸他 (1975) : 加齢と睾丸内分泌機能, ホルモンと臨床, 23, 431~441.
- 48) 黒土稔 (1971) : 睾丸及び前立腺の組織学的研究, 横浜医学, 22, 55~88.
- 49) 熊本悦明, 青木正治, 山口康宏他 (不明) : 加齢と男性性機能, 不明, 不明, 177~191.
- 50) 青木正治, 熊本悦明, 毛利和富 (1987) : 性生活調査による本邦男性の性機能の研究, 泌尿紀要, 33, 1623~1631.
- 51) 白井将文 (1981) : 老年者の性機能, 日本臨床, 39, 100~108.
- 52) 丸田浩, 熊本悦明, 青木正治他 (1990) : 性機能からみた男子更年期, ホルモンと臨床, 38, 101~110.
- 53) 西村隆一, 穂坂正彦, 今野稔他 (1979) : 男性性機能の老化, 代謝, 16, 697~705.
- 54) 今野稔, 穂坂正彦, 西村隆一他 (1975) : 正常男子血

- 中 Testosterone の年齢的变化, ホルモンと臨床, 23, 59~65.
- 55) 岡元健一郎 (1974) : 老人の性機能, 日本老年医学会雑誌, 11, 308~311.
- 56) 熊本悦明, 青木正治, 毛利和富 (1986) : 加齢による男子性機能の変化, ホルモンと臨床, 34, 239~246.
- 57) 熊本悦明, 青木正治, 丸田浩 (1990) : 男性更年期, CURRENT THERAPY, 8, 23~32.
- 58) 熊本悦明 (1993) : 高齢者の性とQOL, 第4回高齢者ケア国際シンポジウム報告書, 75~85.
- 59) 東郷伸一, 川平和美 (1991) : Sexuality, 総合リハ, 19, 339~342.
- 60) 守殿貞夫 (1975) : 老年男子の授精能力, ホルモンと臨床, 23, 15~21.
- 61) 熊本悦明, 丸田浩 (1984) : 老年者の性機能—Potencyを中心に—, 老人科診療, 3, 81~90.
- 62) 一戸喜兵衛, 田中俊誠 (1987) : 更年期の始まりと閉経齢について, 産婦人科の世界, 39, 3~11.
- 63) 松本清一 (不明) : 加齢と性, からだの科学, 63~67.
- 64) 玉田太朗 (1987) : 更年期・定義と範囲, 産婦人科の世界, 39, 13~17.
- 65) 森一郎 (不明) : 女性の更年期, からだの科学, 94~62.
- 66) 広井正彦, 伊藤久仁子 (不明) : 中高年女性の性, からだの科学, 93~98.
- 67) 小山嵩夫・市村三紀男・相沢ゆう子他 (1987) : 更年期症状と血中ホルモンレベル, 産婦人科の世界, 39, 23~27.
- 68) 亀谷謙 (1992) : 性機能の基礎 b) 女性性機能, Geriatric Medicine, 30, 1077~1085.
- 69) 森一郎, 池田友信, 恒吉康男他 (1975) : 加齢に伴なう性機能, ホルモンと臨床, 23, 28~34.
- 70) 森一郎 (1987) : 更年期をめぐる問題点, 産婦人科の世界, 39, 29~36.
- 71) 広井正彦・井上公俊 (1983) : 高年婦人の性, 産科と婦人科, 50, 24~29.
- 72) 青木孝允 (1985) : 老人と性—閉経後婦人における性交障害—, 現代医学, 33, 47~50.
- 73) 広井正彦 (1990) : 中高年婦人の性 (sex), ホルモンと臨床, 38, 159~165.
- 74) 長田尚夫 (1986) : 老年者の愛と性, こころの科学, 5, 87~94.
- 75) 笠井寛司 (不明) : 高年期のセクシュアリティ, Perinatal Care, 12, 875~879.
- 76) 沖利通・永田行博・清瀬みき子他 (不明) : 中高年女性の性と意思表示, Sexual Science, 62~65.
- 77) 井上勝也 (1980) : 老人と性, 老年心理学
- 78) 大工原秀子 (1985) : 老人の性をめぐって 高齢者の性に関する実態調査から, 月刊ナーシング
- 79) 大工原秀子 (1991) : 高齢者の性生活の実態, IMPOTENCE, 6-2, 40~53.
- 80) 荒木乳根子 (1992) : 老いと性, 現代のエスプリ, 301, 104~121.
- 81) 荒木乳根子, 井上勝也, 大川一郎 (1992) : 老年期のセクシュアリティに関する調査研究 性差を中心として, 教育相談研究, 30, 1~7.
- 82) 荒木乳根子 (1995) : 高齢者の性, 総合リハビリテーション, 23-10, 869~874.
- 83) 内野英幸, 能勢隆之 (1994) : 老人に対する公衆衛生的なアプローチ, 日本公衛誌, 41-3, 262~267.
- 84) 副田義也 (1992) : 老年期の性行動について, 現代のエスプリ, 301, 122~137.
- 85) 川田一郎 (1994) : 高齢者の性, 栃木県医学会会誌, 24, 47~53.
- 86) 吉沢勲 (1986) : 老人と性問題, 臨床精神医学, 15-11, 1779~1783.
- 87) 坂口けさみ, 浦富美子, 田中一美他 (1988) : 特集 患者の“性”と看護のかかわり: 臨床実習において看護学生が体験する性問題の実態とその特徴, ナースデータ, 9-6, 11~18.
- 88) 渡辺純一 (1995) : 特集 看護とセクシュアリティ: 性の看護の意識と臨床での実情, 看護管理, 5-5, 298~302.
- 89) 高村寿子, 松本鈴子, 松本清一 (1992) : 特集 セクシュアリティと看護教育: 看護教育における「性」に関する教育の現状と今後の問題, 看護教育, 32-10, 731~736.
- 90) 高村寿子 (1993) : 焦点 ヒューマン・セクシュアリティと看護: 看護教育の中のセクシュアリティ教育の現状—誰が何をどのように教えているのか—, 看護技術, 増39-6, 22~27.
- 91) 高村寿子 (1995) : 特集 看護とセクシュアリティ: セクシュアリティの看護は今 求められる教育と臨床の連携, 看護管理, 5-5, 284~292.
- 92) 松田日登美, 木内和江, 中尾操江他 (1990) : 研究レポート・老人の性に対する看護婦の意識調査, 看護実践の科学, 1990 3, 95~98.
- 93) 渡辺晴美, 久保田美穂, 佐衛田泰子他 (1989) : 老人の性に対する学生の意識調査, 福岡県立看護専門学校看護研究論文集, 39~49.
- 94) 児島良子, 小河信子, 青柳節子他 (1989) : 看護学生の“老人の性”に関するイメージと教育の効果, 看護教育, 第20回, 63~66.
- 95) 川野雅資, 武田 敏 (1989) : 連載・1 ヒューマンセクシュアリティ 看護と性 医療ことに看護に「性」が欠落していた背景, 看護実践の科学, 1989 1, 56~59.
- 96) 川野雅資, 武田敏 (1989) : 連載・12 ヒューマンセクシュアリティ 看護と性 性と面接, 看護実践の科学, 1989 12, 73~76.

- 97) 川野雅資 (1990) : 特集 患者の性と生 患者の性を考える時に考慮しておきたいこと, 看護, 42-9, 57~64.
- 98) 工藤祝子, 岸真知子 (1995) : 特集 看護とセクシュアリティ 臨床教育の場では, 看護管理, 5-5, 293~297.
- 99) 武田宣子 (1992) : 特集 病院における患者の性の問題と看護の関わり 看護婦に望む基本的対応, 看護学雑誌, 56-12, 1106~1110.
- 100) 村本淳子 (1993) : 焦点 ヒューマンセクシュアリティと看護 臨床における性問題とその要因: 性問題からの回避とその影響, 看護技術, 39-6, 38~42.
- 101) 坂口けさみ, 河合富美子, 田中一美他 (1993) : 焦点 ヒューマンセクシュアリティと看護 臨床における性問題とその要因 患者の性問題と看護者の行動パターン-人間関係の視点から-, 看護技術, 39-6, 47~51.
- 102) 大谷真千子 (1991) : 特集 性の理解とケア: 看護婦が会おう性の問題, 看護実践の科学, 1991 3, 28~32.